平成30年度　園長だより NO. 36【H30.6.19】

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（ 文責／園長 石川照代 ）

たくましくしなやかに！ ～先生方へのエール～

六月十二日に、本園において、大分県幼稚園新採用研修・中堅教員研修が開かれました。七十名もの参加者の熱い視線を浴びながらも、子どもたちは実に生き生きのびのびと遊びに没頭する素晴らしい姿を見せてくれました。帰り際、参加者の先生の一人に「何か参考になることはありましたか？」と聞いてみました。すると、「沢山ありました！有り難うございました！」とキラキラ瞳を輝かせながら答えてくれました。

今、幼児教育に携わる教職員の早期離職の問題がクローズアップされています。命を預かる責任の重さや過酷な労働条件、賃金報酬の低さなどによる人手不足だと言われています。本来ならば、目の前の子どもたちは一人残らず未来の大切な人材であり、だからこそ人としての根幹を育てる幼児教育は、経験を積んだプロの教諭や保育士に委ねられるべきなのですが、その経験が積み上がる前に去らねばならない状況に追い込まれてしまうというのは一体どういうことなのでしょうか。

行政を含めて各方面が、今この問題に真剣に取り組み始めています。本園も、今回のように県の教育委員会の依頼に協力するだけでなく、「幼児教育フォーラム」と「リカレント研修」を立ち上げました。現職教員への「研修の場」を提供することは、教育実習を受け入れてきた本園であれば可能なことであり、大学のミッションでもある「地域貢献」にもなるでしょう。自ら研修に出向く意欲や気力、勤務園の理解等の条件はありますが、少しでも悩みや困りを抱えながら踏ん張っている先生方の力になれればと考えています。

本園は、幼児教育に携わる全ての先生方に心からのエールを送ります。また、保護者の皆様には、本園の新たな取組みとしてご理解頂き、研修生が子どもたちと接することがありますが、ご承知おき下さいますようお願い致します。

「ありがとう」に見える心の育ち

園長室にいると、保健室を訪れる子どもたちの声がよく聞こえます。ある時、年中の男の子が「なんかふらふらする」といって来ました。熱もないようでしたのでベッドに横にさせ、少し話をしていると、「お母さんに来て欲しい」と言いました。「もう少しでお迎えに来る時間だよ」と言われると、じきに意を決したようにベッドから起き上がり、「もう行く！」ときっぱり！去り際に「ありがとう！」と言って、保健室から園庭に飛び出して行ったのです。彼の「ありがとう」は、自分の気持ちを受け止めてくれたことへのお礼でしょうか？それがあまりに自然で、一部始終を聞いていた私は、驚くと同時にとてもうれしい気持ちになりました。その子の心の育ちまでもが見えるようだと思いました。

「自分で、自分から、自分たちで」

附属幼稚園が見出した保育の究極のテーマともいうべき合言葉がこれです。3 歳児は、「自分でできるように」4 歳児は、「自分から進んでできるように」5 歳児は「友だちと協同してできるように」という育ちのステップを示すものでもあります。

さて、各年齢には、これらの育ちを促すのに最適な「教具」が環境として用意されています。それらは、**そこに存在するだけで**子どもにインスピレーションを与え、**活動を誘発する**力を秘めています。出会わせるだけで子どもが「～したくなる」のです。それらで遊ぶ姿を見ていると「環境を通して行う」保育とはどういうことなのかを、はっきりと教えてくれます。年少児の「井型積み木」、年中児の「ログ積み木」年長児の「巧技台」などはその代表格です。多様に組み替えられるのが共通点。子どもたちの創意工夫と試行錯誤を促してくれる優れものです！